

だいせんじもんじょ
大山寺文書 説明資料

- 1 名 称 大山寺文書
- 2 員 数 10点
- 3 所在の場所 大山町
- 4 所 有 者 宗教法人
- 5 種 別 保護文化財 古文書の部
- 6 基 準 1 古文書類は、我が県の歴史上重要と認められるもの
- 7 説 明

(1) 伝来の経緯

大山寺文書は、天台宗角磐山大山寺（西伯郡大山町）の伝来文書である。

大山寺は、少なくとも奈良時代から修験道の聖地として発展した山岳信仰の拠点であり、平安時代には天台宗と結び付き、広く崇敬を集めた一山寺院である。中世以降には、西明院・南光院・中門院の三院谷が成立し、無数の諸院・堂社が軒を連ね、「伊呂波字類抄」には僧兵3千余に及んだと記されている。しかし、中世末期～近世初期には大きく衰退したと言われており、また度重なる火災のため数多くの寺宝・古文書が焼失し、往時の隆盛をうかがわせる史料はきわめて限られている。今日に伝えられた大山寺文書は、奇跡的に焼失をまぬがれてきたものである。

大山寺関連の指定文化財としては、これまでに仏像4件（木造阿弥陀如来及び両脇侍像、銅造観世音菩薩立像〔一軀〕、銅造十一面観音立像、銅造観世音菩薩立像〔二軀〕）と鉄製厨子1件（鉄製厨子 附祈願文鏤刻ノ鉄板三枚、鉄造地藏菩薩ノ頭部）、阿弥陀堂1棟が国の重要文化財に指定されている。また本県の保護文化財として、大山寺宝物館靈宝閣所在の梵鐘（工芸品）がすでに指定を受けている。このほかにも大山寺には、いくつかの金石文・棟札銘（後世の記録に写が残されたものを含む）が、なおいくつか存在しており、大山寺文書はそれらと一体的な価値を有するものである。

(2) 文書の内容

このたび文化財指定候補として答申する古文書は、大山寺伝来文書のうち、大山寺宝物館靈宝閣に所蔵されている中世文書（及びそれに準ずる文書）10点であり、裏打ち軸装された卷子1巻に収められている。

- 1、観応2年（1351）5月24日 山名時氏寄進状
- 2、応永10年（1403）6月20日 山名氏之遵行状案
- 3、応永10年（1403）11月12日 文書注文
- 4、応永28年（1421）11月19日 御寺領目録
- 5、応永29年（1422）4月8日 前下野守・福頼上野守連署下知状写
- 6、永享12年（1440）12月24日 山名持豊安堵状

- 7、長禄2年(1458)8月16日 某安堵状
- 8、天正9年(1581)10月12日 杉原盛重寄進状(礼紙付)
- 9、(年未詳)6月26日 山門使節連署書状案
- 10、(年月日不詳)文書目録渡状

それぞれの文書について、概要を述べる。

1・2・6・7・8は、もとは西明院に伝来したものであったと考えられる。南北朝時代から戦国時代末期に至るまで、西明院が、伯耆国守護を輩出した山名氏一族や、毛利氏時代に西伯耆を治めた杉原盛重などから、久古御厨(久古御牧地頭職・久古御牧荘一円・久古村・久古荘)(伯耆町)、渡村(日野町)内などを、寄進・安堵されたもの(及びその写)である。特に1・6・8は、良質な原文書として貴重である。3は、応永10年(1403)の文書目録であり、大山寺内のいずれかの子院に論旨を含む多数の文書が存在していたことを示している。4は、おかも(倉吉市の小鴨か)の寺領分について、5は、稲光保(大山町)公田に課せられた段銭の半済分について記したものである。10は、中門院に属した法明院へ引き渡された文書の目録と考えられ、中世において豊松荘、宇多河荘(米子市淀江町)、由良郷(北栄町)、大谷郷(北栄町)、土井郷、方見郷(琴浦町)を所領とした子院が存在したことをうかがわせている。いずれも、中世における大山寺内諸院が有した経済基盤の一部であると推測される。9は、室町幕府奉行人に対して將軍への披露を依頼した山門諸房の連署状であり、大山寺が本山である比叡山を介して幕府へ寺領安堵の申請をした際の案文であると考えられる。

火災がなければ、大山寺には多数の中世以前の文書が伝来した可能性が高く、以上の10点はその一断片にすぎないと考えられる。にもかかわらず、中世の大山寺領が伯耆国の広範囲に及び、天皇・將軍・守護をはじめ多数の寄進状・安堵状等によってそれらが公認されていたことを確認できる点は、特に重要であると思われる。

(3) 評価

以上のように、大山寺文書は、伯耆国及びその周辺の広い地域の歴史に大きな影響を与えた大規模寺院に伝来した文書であり、例外的に焼失をまぬがれたものであるにも関わらず、県内の一ヶ所に伝来した中世文書としては点数も多い。山陰地域を代表する大寺院の伝来文書として重要であるのみならず、まとまりをもって県内に伝来した鳥取県関係の中世文書としても貴重であり、本県の歴史上において重要と認められる。

よって、大山寺文書は鳥取県指定文化財に指定し保護するに相応しい価値を有するものと判断される。なお、文書自体の保存状態は良好であるが、軸装に若干の経年劣化がみられ、今後の管理については一層の配慮を求めたい。

【参考文献】 『鳥取県史2 中世』(1973年)

小川家住宅 説明資料

1. 名 称 小川家住宅
2. 員 数 6棟 主屋、道具蔵、二階蔵、三階蔵、ビン詰場、旧仕込蔵
3. 所在の場所 倉吉市河原町1969、1969-2
4. 所 有 者 個人
5. 文化財の種別 保護文化財（建造物の部）
6. 基 準 (1) 意匠的に優秀なもの
7. 説 明

【当家の歴史】

小川家は屋号を中江（恵）屋と号し、江戸後期に上北条（現倉吉市）から現在の地に移り住んだ孫右エ門を初代とし、明治初期、2代富三郎より酒造業を営んだ。明治後期には4代貞四郎が製糸業で財をなし、5代貞一とともに、小川合名会社、倉吉醤油株式会社を立ち上げるなど、実業家として活躍した一方で学校設立にも尽力し、茶の湯に精通するなど、倉吉の文化および商業の発展に貢献した。また、5代当主小川貞一は県会議員、貴族院議員をつとめた名士であった。

【配置】

小川家住宅は、鳥取県中部を流れる天神川の支流・小鴨川の右岸沿いの河原町^{かわらまち}に位置する。これは打吹山麓に東西に広がる町の西端にあたり、東端は重要伝統的建造物群保存地区倉吉市打吹玉川地区である。その屋敷建物は本通りと鉢屋川^{はちやがわ}の間に住宅と酒造関連の建造物が建つ宅地を構え、道を挟んだ宅地の西側には、広大な池泉回遊式庭園「環翠園」^{かんすいえん}を置く。本通りに北面して主屋^{しゅおく}を配し、北東側に小規模な洋館を接続し、その前面の一面を鉄筋コンクリートの柵で囲って前庭とする。主屋西隣には通りに面して門を構え、小さな前庭を挟んで新座敷^{しんざしき}が建ち、その南側に茶室「清和軒」^{せいわけん}を角屋^{つのや}として張り出す。主屋背面、宅地中央東側には南北方向に棟を掛けたビン詰場、宅地南側の鉢屋川沿いには東西方向に棟を掛けた旧仕込蔵が建つ。また、宅地中央には主屋と中庭を挟んで南側に西から道具蔵、三階蔵、そして南に折れて二階蔵が並ぶ。

環翠園は南側中央に建つ「南山荘」^{なんざんそう}¹を中心として、複数の腰掛待合^{こしかけまちあい}や厠^{かわや}で構成される²。

1 参考文献3より、昭和5年頃に三朝の秋山家から移築し、作庭は神戸の庭師、巽武之助とのこと。南山荘には国指定重要文化財（建造物）「菅田庵及び向月亭」写しの茶室を備える。

2 平成10年に主屋、道具蔵、二階蔵、三階蔵、ビン詰場、旧仕込蔵、槽場の7棟が国登録有形文化財（建造物）に、平成22年に環翠園および主屋の中庭、前庭は国登録記念物（名勝）に登録された。

【主屋】

主屋は、主体部、洋館、新座敷、茶室「清和軒」からなる。主体部は木造二階建、切妻造平入の黒色棧瓦葺で、明治後期の建築と考えられる。正面は一階東側に木製ガラス引戸を並べ、西側は道に面して格子付の塀を建てる。二階は東側に格子を設け、二階は腰を四半張りの海鼠壁とする。道側へのぼした庇の桁を支える湾曲した腕木や、木製ガラス引戸の下部を支える持ち送りには絵様が施される。

平面は、東に土間を通して床上を2列3室とし、土間東面には店台と隣接する洋館への入り口が設けられる。床上は東列手前よりミセ、事務所、居間とする。ミセと事務所³は板敷とし、ミセは一段低くし、土間境に木製カウンターを設ける。東列は各部屋に差鴨居を巡らせ、特に事務所と土間との境には下部を虹梁状に欠いた差鴨居を入れ、建具を入れずに開放とする。ミセおよび土間には根太天井をはり、事務所の天井は二階まで吹き抜けた竿縁天井とし、西面壁上部には幅の広い神棚を設ける。西列は手前よりコーシノマ、ナカノマ、オクノマとし、長押を付ける。コーシノマは西側に床を構え、ナカノマとの室境には各地の名所をあしらった欄間をはめ、火灯窓、仏壇隣には蓮を描いた襖を用いる。ナカノマの東面には、北側に仏壇、南側に新座敷への出入口を設ける。オクノマは西面に床を構え、黒柿等の銘木を数種類使い分ける。

主体部二階は南・北にそれぞれ2室を備え、事務所西面及び居間南縁の階段から上がるほか、土間上の渡り廊下で互いに接続する⁴。渡り廊下へは洋館内と通じており、洋館と接する二階居室の建具や、渡り廊下の手すりなどを洋風の設えとしている。

洋館は昭和初期の増築⁵で、正面外観にはモルタルでコリント式オーダー・エンタブレチュアをあしらう。内壁は布張りに腰板張りとし、主体部の二階渡り廊下へと接続する階段部分内壁は、漆喰壁に腰板張りとする⁶。

新座敷は昭和初期の建築⁷で木造二階建、切妻造平入の赤色棧瓦葺で本通りに面して門及び塀が付く⁸。一階は十畳の主座敷と四畳の次の間、玄関、階段⁹で構成され、十畳の座敷は西面に幅の広い床と平書院を備え、床まわりには素木の銘木が多用される。北側へ車寄状に張

³現在板敷だが、かつて畳敷だったという。

⁴明治40年頃は二階がある部屋の下の部屋は根太天井とするのが一般的であるが、すべての部屋を竿縁天井とし、一階天井と二階の床構造を分けている点で、当家住宅は先進的である。

⁵課税台帳では昭和3年とされる。

⁶二階の縁台へ出られるようになっていたとのことであるが、現在は階段室のみが残る。

⁷課税台帳では昭和7年建築とされる。

⁸現当主への聞き取りによると、棟方志功来訪時と、家族の葬式などでこの門を使ったとの事だが、近年は使用されていない。

⁹玄関の北西隅にとりつく階段室は、元は西側に隣接する離れと接続していたが、平成8年頃に離れの取り壊し時に切断された。

り出した玄関は格天井とする。二階は八畳の座敷と六畳の次の間からなり、北面に様々な素木の銘木を用いた床まわりを配し、南側一面を縁とする。

茶室「清和軒」は昭和初期の建築¹⁰で木造平屋建、切妻造妻入の赤色棧瓦葺で、新座敷から南に延びる渡り廊下で接続する。客用の便所と風呂、茶室からなり、渡り廊下の途中には新座敷二階への階段及び石製の洗い場を設ける。外壁は主に土壁仕上げの数寄屋風とし、庭園との調和が図られている。茶室は一畳台目、炉は向切とする。風呂場には石材が多用され、便所は畳敷きとする。茶室「清和軒」は新座敷及び主屋南側庭園と一連の整備と考えられ、新座敷階段まわりや茶室「清和軒」への渡り廊下などに、森田光達¹¹など昭和初期に活躍した画家の板絵が随所に用いられている。

主屋主体部は主に檜と杉の面皮材を用い、間取りや正面庇の絵様をもつ腕木や土間境の虹梁状の差鴨居など、近世から続く倉吉の商家建築の特徴を色濃く残す一方で、主体部、新座敷に見られる多彩な銘木を多用することや、洋館のコリント式オーダーなどを用いた古典主義様式の意匠や接続形式など、明治後期から昭和初期にかけての時代の好みを巧みに取り入れている。

【道具蔵】

昭和前期建築¹²の土蔵造二階建、寄棟造の赤色棧瓦葺として軒廻りまで漆喰で塗り込めて東面に庇をつける¹³。基礎は高い切石二段積とし、腰を海鼠壁風の漆喰塗りとする。また、北面には中庭を挟んで向かいに位置する茶室「清和軒」のための腰掛待合¹⁴がとりつく。一階は転用材を多用し、小屋組は束立の素朴な和小屋とする。

【二階蔵】

昭和前期建築¹⁵の土蔵造二階建、切妻造の赤色棧瓦葺とし、東面に庇をつける¹⁶。基礎は高くあげた切石二段積風のモルタル洗い出し仕上げになる鉄筋コンクリート造とする。外壁は軒までを塗り込めた全面漆喰仕上げとし、小屋組は二重梁が近接する和小屋とする。

【三階蔵】

鉄筋コンクリート造の地階を基礎として、その上に二階建の土蔵造が建つ昭和前期建築¹⁷で

¹⁰課税台帳では昭和7年建築とされる。

¹¹明治31年生、昭和51年没。現米子市淀江町出身の画家で、日本画家。「鯉の光達」と称される。鳥取県展、鳥取市展の運営。郷土の美術振興に寄与。(鳥取県郷土人物DBより)

¹²課税台帳では昭和18年とされる。

¹³主に茶道具類をおさめる。

¹⁴名勝小川氏庭園の構成要素とする。

¹⁵課税台帳では昭和17年建築とされる。当家に残る蔵の中でもっとも古いと伝わるが、根拠は不明。

¹⁶屏風類や漆器類などを納める。

¹⁷課税台帳では昭和17年建築とされる。

切妻造の黒色棧瓦葺とし、棟石を載せる¹⁸。外壁は軒までモルタルで塗り込め、東側に庇を出す。小屋組は束の長い二重梁の和小屋とする。

【ビン詰場】

明治後期建築¹⁹の土蔵造二階建、切妻造の赤色棧瓦葺で棟石を載せる。乱積^{らんづみ}の基礎の上に建ち、西側には大きく庇を出て室内化する。西面の一部には、ボイラー室の跡にレンガ壁が残る。小屋組は二重梁の和小屋とする²⁰。

【旧仕込蔵】

大正後期の建築²¹で、木造平屋建、一部土蔵造の中央に腰屋根を設けた切妻造の赤色棧瓦葺。通路を挟んで西側の槽場^{ふなば}と、東側の旧仕込蔵からなる。槽場南面はレンガ壁とし、水車跡がとりつく。旧仕込蔵の南面は漆喰壁とし、鉢屋川沿いに並ぶレンガ壁と漆喰壁は、重要な景観の要素となっている。

小川家住宅の主屋は、湾曲した絵様腕木、虹梁状の差鴨居など鳥取県中部における近代の商家建築の特徴を良く示している。増築された洋館、新座敷、茶室「清和軒」や蔵など、一連の近代実業家としての屋敷構えからは、各時代の好みを含めた建築に関する時代変遷の動向を窺うことができる。また、鉢屋川及び本通り周辺に広がる伝統的建造物が多く残る当地区において核となる貴重な建造物である。

【参考文献】

1. 鳥取教育委員会、『鳥取県の近代化遺産—鳥取県近代化遺産総合調査報告書—』、1998
2. 鳥取教育委員会、『鳥取県の近代和風建築—鳥取県近代和風建築総合調査報告書—』、2007
3. 小椋繁治・山崎五郎・安藤重良著、『倉吉市誌』、昭和31年
4. 福光勝次郎編、『倉吉町誌』、1941年
5. 桑田忠之助・福留章太著、『倉吉市史』、昭和31年
6. 鳥取女子短期大学生活学科生活科学専攻 住居デザインコース 田中研究室『小川酒造建物調査報告書』、平成7年3月

¹⁸地階は漬け物小屋および器具庫、一、二階は大量の緋の布団類を納める。

¹⁹課税台帳では明治38年とされる。

²⁰一部では和釘が確認できる。

²¹課税台帳では大正13年とされる。

おがわし
小川氏庭園 説明資料

- 1 名称 小川氏庭園
- 2 員数 一式（前庭、中庭、環翠園、水道山の層塔）
- 3 所在の場所 倉吉市河原町1963-1、1964-1、1965-1、1969、
1969-2、1969-3、1936-1
倉吉市余戸谷町3611-1、3612-1
- 4 所有者 個人
- 5 文化財の種別 史跡名勝天然記念物（名勝）
- 6 指定基準 名勝 1公園、庭園
- 7 説明

<小川家の沿革>

倉吉市河原町の小川家は、屋号を中江（恵）屋といい、小川富三郎[1804-1891]は酒造綿商売で財を成した。貞四郎[1845-1915]は、銘酒「久米川」販売の他、明治26年小川製糸場を設け、県下有数の生産額を誇る。

貞一[1882-1943]は、明治43年小川合名会社を創立し、大正4年には酒銘を「打吹正宗」に改めた。県下の金融・産業組合関係の様々な要職に就き、地方財界の重鎮であった。県会議員、貴族院議員を務め、政治家としても活躍し、教育振興にも熱心で、女子教育のため県立倉吉高女、県女子師範学校の設立に貢献した。大正中期頃には、謡、喜多流を学び、晩年、茶の湯を岡島陽城（よつがき）に志野流の手ほどきを受けた。敷地の南側の「環翠園」は貞一の別邸で、作庭は巽武之助と伝わる。園内の茶亭は、昭和5年頃三朝温泉の岩崎旅館の隣の秋山氏茶室を譲り受けて移建したもので、松江市菅田庵（かんてんあん）の写しという。大正から昭和初期にかけて豪華な茶会が開かれ、県下には見られない本懐石などが行われたという。貞四郎・貞一ともに教養高く趣味の豊かな文化人であった。

昭和20～22年、環翠園の茶亭には、大阪の丹青界の大家、菅楯彦が住まった。その頃描いたものに、谷崎潤一郎の新刊本「細雪」の装丁の絵がある。昭和28年には日本民芸協会のバーナード・リーチ氏を歓待している。このように小川家は、県内屈指の資産家として倉吉の近代化の基盤を作った家系であり、文化芸術向上にも大きな影響を与えた。

<前庭>

小川氏庭園は、本通りに面した「前庭」、主屋と土蔵の間の「中庭」、鉢屋川沿いの別区画の「環翠園」から構成される。

前庭は、新座敷玄関前、及び敷地北端部の洋館前に作られている。新座敷玄関前の庭園は、本通りに面した塀際の見越しの松が見事である。門内には大振りの扇形の石を据え、石敷きの中に飛石と延段を連ね玄関に至る。創作ものの灯籠2基のうちの一つは、同型品が環翠園にあり「出雲松江藤井善太郎作」の銘をもつ。建築年代、延段の意匠、灯籠の共有関係から、環翠園と同じ昭和前期と推定される。洋館前の庭園は、曲線を組み合わせた柵に囲まれ、景石とシュロ、アオギリの木などを配する。

<中庭>

建物に囲まれた狭小な空間を巧みに使い、流れを主題に主屋から縦長に眺める庭と、主屋から見えない位置に設けた露地からなり、両者を巧みに融合させている。主屋前には、オクノマ前の菱形の石、新

座敷前の円形の緑泥片岩など派手な色石を使い、庭へ降り立つ鑑賞の地とする。

オクノマからは、遠方の築山上に層塔がそびえ、土蔵を背景として、最奥部からの石敷の流れが庭のほぼ全域に展開する立体感のある景観をなす。流れの屈折する水際には、杭に見立てた円柱状の加工石を多用する。傍らに蒐集中の逸品、大坂の淀屋に所縁のある倉吉の江戸期の豪商、牧田杜陵^{とりにょう}の句碑を立てる。

こうした近代的な庭園から石橋を渡り西側へ向かうと、次第に茶室を主とした古雅な露地の空間へと変化する。茶室「清和軒」は、石敷で表現された枯流れの中に建ち、本格的な露地を構える。額見石前の灯籠は当園で唯一の野灯籠である。茶室は一畳台目の小間ではあるが、隣室には大理石の浴槽を備えるなど、自由な発想のもとに作られた接客空間である。

築山と石造物の配置、流れの石組・杭状加工石などが環翠園と類似することから、環翠園と同じ昭和初期頃に、主屋とともに以前から存在していたであろう庭を改修した結果と推定される。

<環翠園>

東西約 32m南北約 40mの規模をもつ池泉回遊式庭園である。敷地の東辺中央には端正な庭門、南西側中央には鑑賞の中心点として茶亭「南山荘」を置き、その正面に広がる池の周囲三方には築山が築かれ、それぞれの最高地点には南の腰掛待合、五重塔、北の腰掛待合が配される。南の腰掛待合と五重塔の間には、かつて草庵風の茶亭「洗心亭」が存在したが、現在は建物基礎のみが残る。

池水は、鉢屋川の流れを直接引水するもので、茶亭「南山荘」正面に広がる池、亀島を廻して再び川に戻している。

池の周囲を回遊する園路には、石段、飛石、カラフルな小砂利の洗い出し舗装などを用い、各所に滝組・井戸・小池等の流れを配するなど創造性豊かな技巧を駆使している。また、30基近い石灯籠や石塔、小鴨川橋の欄干や大坂の道標等といった歴史資料、さらにはモニュメンタルな赤煉瓦の煙突を随所に組み込みつつ、露地を巧妙に構築している点は本庭園の特長である。園内のみならず、池の北側から南山荘の背後に望む水道山の中腹には十三重の塔が立てられており、借景にアクセントを添えている。

花木も邸宅の庭とは異なり大木を周囲に配したものとなっており、藤棚をはじめ花木の種類も多く、四季を彩る植栽となっている。

<庭師 巽武之助>

巽武之助は、神戸の新開地の置屋の息子に生まれ、京都で作庭を学び、関西で仕事をして芦屋の邸宅の庭も数多く手掛けたという。「流れ」と「回遊」の景趣を得意とする作風は鳥取でも評価されていたようで、巽の作庭と伝わるものが県下で数例知られている。

<本庭園の文化財的価値>

小川氏庭園は、巽武之助の代表作であり、個人の近代庭園として山陰屈指のものである。倉吉の商家の近代庭園を代表する存在として、当地方の作庭技術・茶道等に与えた影響は大きく、芸術文化向上にも寄与した重要な庭園である。保存および活用のための措置が必要であり、この文化財的価値を後世に伝えていくべきと考える。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧 (前庭)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
1	門	正門	瓦葺	河原町通りに面した正門。ミセの出入口から見て西側。屋根は切妻造りで一文字瓦葺。両開板扉で内側に開く。門内には、方形の切石を並列した先に、大ぶりの扇形の花崗岩を据える。門冠りはマツ。平常では使用されない門。
2	塀		瓦葺	門の両側に建つ。壁上部は漆喰塗り。棟高は門より低い。
3	灯笼	石灯笼	生込み灯笼	正門を潜って正面に設置。富士山を思わせる洗練されたモダンな変形灯笼。御影石製。灯上石は青黒石の二段石。周りには棕櫚が植わる。
4	延段		寄石敷	玄関前面に設置した延段。御影石の切石を両側に置き、間に黒石の玉石を敷き詰めたもの。似た意匠は、環翠園の庭門の手前に在るが、石材の配置や組合せを異にする。 延段と飛石は、那智石の小石を敷き詰めた枯流れの中に据えられている。
5	灯笼	石灯笼	六角灯笼	門を潜って左隅に立つ六角灯笼。環翠園の一丈物の「出雲松江藤井善太郎作」と銘のある灯笼の中型品。小川氏庭園内に同形3基有るうちの中型のもの。笠の軒先端が外上方に反り、蓮台様中台の連弁が火袋までせり上がる華美なもの。乗待石製。灯上石は二段石。
6	景石			洋館前の前庭にある2点の景石。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧 (中庭)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
1	石段			邸宅庭の入口の庭門の石段。花崗岩の川原石で段を作り、目地に多孔質の丸小石を使用する。石段の下から1段目と2段目は鞍馬石。
2	門	庭門		東から入る門。石段の上設置する意匠はこの門のみ。屋根は切妻造りで鉄板葺。両開板扉で内側に開く。門冠りはカシ。
3	垣	竹垣・石積		庭門の両側を画する石積上に建つ竹垣。四つ目垣。石積は基礎に花崗岩を点在させ、大きめの多孔質の五郎太石の玉石で化粧して築く。
4	灯笼	石灯笼	六角灯笼	庭門を潜って左に立つ灯笼。御影石製。火袋と中台・基礎は六角形。前に踏み台となる大石を置く。火袋には右2面に連続する「鳳凰」、左に「獅子」・「牡丹」を彫刻する珍しいもの。
5	景物	句碑		三階蔵の北西隅部に設置。主屋から眺望させる位置で新座敷方向に面を向けるが、句は石橋から詠ませる。 元々、倉吉の江戸時代末期の豪商、牧田杜陵(名は庸定、通称仁右工門、安政3(1856)年12月、34歳で没)が庭(倉吉市東岩倉町)に建てた句碑を、蒐集中の逸品として持ち込んだもの。 句碑には「三日月や はや手にさはる 草の薙 翁」とあり、芭蕉の弟子、天野桃庵の秋季の句。
6	石橋	反橋	一枚岩加工石	流れの中程に、茶室に向かって架かる反橋。鞍馬石製。環翠園の石橋と比べると短く厚いもので、加工を最小限に留めている。橋を架けることにより、水の存在を強く示唆する。橋左の流れの中、橋右の流れの護岸に巨石の伏石を用いる。 石橋にかかるよう流れ松の枝が伸びる。橋を渡ると露地となる。
7	灯笼	石灯笼	菱形灯笼	石橋から流れ上流の左岸、川縁に設置。生込み灯笼。御影石製。直線で構成された創作もの。笠から竿まで平面菱形。橋の橋脚を模した六角柱を添える。三角灯笼から離れた位置に効果的に配置。
8	層塔	層塔	十三重塔	南側の築山の高所、川の左岸の縁に立地。菱形灯笼と句碑の奥に多層塔を見せる意匠。花崗岩製。軸部には四方仏を彫刻する。高さ約3.5m。
9	石組・流れ			庭園南東部の最高所から流れを作る。水源は井戸水で、蛇口を2本残すが現在は水の供給が断たれ濁水。川の落差は約1.0m。上流部に水量を一旦溜めて幅を持たせて水を流す。石橋より上流は4箇所屈折させ、石橋近くに大きな水分石を置いて川幅を広げるが、石橋を潜らせて川幅を狭める。下流はオクノマの方向に緩やかに下り、大きく東方に曲流して終わる。 流れ出た水は石と石の間を複雑に流れる渓流。川際には杭に見立てた柱状の加工石を頭の高さを不揃いに使う。川底は青石(三朝町竹田川上流の石:竹田の石)が大きき・形状を変えて貼付けられ、水の流れに表情をつける。
10	灯笼	石灯笼	山灯笼	茶室の南側に立つ生込み灯笼。笠には山型の石を載せる。火袋は整形加工した石。中台は安山岩(へぎ石)。竿は自然石。大きめの前石を有す。
11	建造物	砂雪隠		内露地に設けた便所。添景物。屋根は庇を付け下ろす。金属板葺。壁面に円形の地下窓を開け、中央に竹が添えられる。
12	蹲踞		ミニチュア	軒内に造られた雪隠に伴う蹲踞の石組み。観賞・装飾用とみられる小型のもの。手水鉢は不明。右に軸垣のための青石の差石が残る。
13	石塔	五輪塔		蹲踞の奥部に設置。小型の五輪塔の火輪のみで、水輪様に上面を平らにした山形の自然石と組ませる。
14	灯笼	石灯笼	置灯笼	腰掛の北に設置。御影石製。火袋六角形で、月を彫りだした面を園路に向ける。笠は降棟に鬼瓦様の彫出しをしたもの。
15	踏分石	踏分石	加工石	腰掛の手前、蹲踞の水路縁に設置した、方形の加工石。「腰掛へ沢渡りして取り付く飛石」と「道具蔵入口へ続く飛石」との分岐点。茶室の額見石ともなっている。
16	建造物	腰掛待合	木造片流れ造・金属板葺	道具蔵の北壁を背面として付底で作った腰掛。屋根は片流れ。前面吹き放ち構造。東壁は竹垣。腰掛は板張り。軒内のたたき土間に、黒石の延段を据える。
17	蹲踞	蹲踞	中鉢蹲踞	茶室「清和軒」の南に位置する。水門内中央に自然石の鞍馬石の手水鉢を据え、周囲はやや大きめの色彩の異なる川原石で囲うカラフルなもの。海には那智石を敷く。排水溝は多孔質の五郎太石で腰掛の東側に導く。
18	灯笼	石灯笼	置灯笼	蹲踞を構成する、手水鉢の左の台石の上に設置。御影石製。笠・火袋・中台は円形。笠の三方に小さな鉄手が付く。脚は短い猫脚三脚。中台と脚は一体。 台石は側面を円柱状に加工した花崗岩。
19	灯笼	石灯笼	生込み灯笼	茶室「清和軒」の西隅部に設置。乗待石製。火袋と竿とが一体となったもの。珠光形灯笼。徳利を逆さにした様の灯笼。竿部腐蝕。前に石有り。
20	園路	飛石		蹲踞から茶室前の流れに至る飛石。連続して石臼を3個使用。千鳥掛。
21	流れ		枯流れ	茶室「清和軒」入口前に南西から北東方向への流れを造り、那智石を敷き詰める。
22	蹲踞	蹲踞	中鉢蹲踞	茶室「清和軒」の西、流れの中に設置する。水門内中央に五輪塔水輪に見立てた鉄鉢形手水鉢を据える。手水鉢の四方には梵字を刻む。周囲は多孔質の五郎太石で築き、那智石を敷く。水の流れは建物沿いの雨落ち溝で北に流すが、建物下を潜らせるように見える意匠。
23	灯笼	石灯笼	寄せ灯笼	茶室の西側の蹲踞の右奥に立つ灯笼。五輪塔の空風輪に、二段の環状に加工した笠。火窓・日・月を穿ち自然石の風合いを残した火袋を組み合わせ、四角柱に磨いた青石に載せる。奇抜な意匠。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧 (中庭)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
24	踏石			茶室入口に据えた踏石。那智石敷きの流れの中に入口を設ける。
25	建造物	壁	壁	建物の北に斜めに突き出す壁に、伯耆国分寺跡の古代瓦を埋め込んでいるもの。
26	建造物	祠		屋敷神の祠。東向き木造銅板葺の社殿を石積の基壇の上に設置する。石積は青石(三朝町竹田川上流の石:竹田の石)。
27	園路	飛石		道具蔵北辺沿いに西方に進む園路に打たれた飛石。石臼3個使用。
28	灯笼	石灯笼	生込み灯笼	道具蔵沿いの園路中程に設置。円形灯笼。山形に整形された笠部は破損して縦に二分し、その片方が横位に載せられた状態。もう片方は下に置かれる。火上石はやや大きい平石。
29	園路	敷石		道具蔵の西にあった建物へ連なる敷石。青石(三朝町竹田川上流の石:竹田の石)の敷こぼし。所々にやや青黒い智頭石が入る。
30	園路	敷石		道具蔵南辺沿いの東西方向の長い園路の敷石。青石(三朝町竹田川上流の石:竹田の石)の敷こぼし。所々にやや青黒い智頭石が入る。
31	灯笼	陶製灯笼	組立て式	腰掛内に保管されていた1体分で設置場所は不明。道具蔵沿いの園路に設置した。「山形の笠部」、「銘のヘラガキされた火袋」、「中台」、「中筒の竿部」の四分割して作られる。茶色を基調とし白色の釉薬が流れる。唐津焼か。小川氏庭園内で唯一の陶製灯笼。
32	園路	敷石		道具蔵前と三階蔵の間の園路の屈折する敷石。青石(三朝町竹田川上流の石:竹田の石)の敷こぼし。所々にやや青黒い智頭石が入る。
33	石積			三階蔵の西辺に築かれた築山を支える石積。大型の石を使用。南に青石を用いた井戸様の石組みがあり、上に蛇口がつく。
34	灯笼		置灯笼	築山の石積の上、流れの水溜めの傍らに置く。宝珠から笠部まで一連のもので、來待石製。四角灯笼の蔵手が付く大きめの笠。別石材の火袋と組み、自然石を台とする。
35	伽藍石	踏分石		大型の伽藍石。伽藍石は小川氏庭園ではこれのみで、景石としても用いられている。鞍馬石製。前後の飛石に多数の鞍馬石が用いられる。
36	沢飛び石			流れの中に飛石を設け、横切るもの。青石・那智石・鞍馬石の粗目石の3色を渡る。
37	景石		磯石	沢飛び石の脇の大型の磯石で複雑に凹凸をもつ。宇野石(湯梨浜町橋津辺り)。
38	灯笼	石灯笼	雪見灯笼	沢飛び石の奥に置く。四脚の雪見灯笼。水辺を表示する。花崗岩製。京都の白川産。
39	流れと敷砂		枯流れ	主屋の前面の東西に那智石を敷き詰めて流れを作る。その岸辺には、鞍馬石の粗目石(鞍馬のピリ(微粒))が敷かれた。島根県荒島の粗目石を足している。
40	踏分石	踏分石	平石・青石	新座敷寄りの流れにかかる位置に据えた大型の平石で、緑色の結晶片岩。四国産の青石。景石であり、庭全体を眺望する物見石を兼ねる。周辺の飛石と同質の青石が点在するが、最も丁寧に磨かれ艶がある。
41	灯笼	石灯笼	三角灯笼	新座敷の前、枯流れ際に設置された灯笼。小型ながら迫力がある。火袋には日・月・火窓が開く。側面が三角形の富士山形の景石の傍らに置いて調和を図る。
42	景石		富士山型	茶室「清和軒」への渡り廊下の床下にかかるように据えられた自然石の珍石。円錐形の形状から裾野の広がる富士山に見立て奥深さを象徴したものと考えられる。
43	沓脱石	沓脱石		新座敷の沓脱石。鞍馬石の自然石。
44	建造物	祠	石造	屋敷神の祠。南向きの石造社殿を石積の基壇の上に設置する。前石を有す。
45	鉢前			茶室「清和軒」への渡り廊下、便所の手前に接して据える。縁先手水鉢は四角柱に加工された立派なもので、2面に鶴、他の面に亀、竹が絵画的に華麗に浮き彫りされる。水汲石・水揚石を伴う。海には那智石を敷く。
46	垣	袖垣	竹垣	鉢前に設置された竹垣。
47	鉢前			オクノマから見て右手に設置された鉢前。簀子縁に接して据えた縁先手水鉢は、二重椀形に加工されたもので、小川家の家紋である「釘抜き紋」をあしらっている。水穴は円形。手水鉢の台石には稜角の多い四国の赤石、清浄石と磐石には左治石を用いる。水汲石・水揚石となるような天端の平らな石はない。海には那智石を敷く。
48	垣	袖垣	竹垣	鉢前に設置された竹垣。
49	踏分石		菱形石	オクノマの前に据えられた菱形の大型の平石。断面が白と褐色の縞状の美しいもの。珍石。庭全体を眺望する物見石を兼ねる。
50	沓脱石	沓脱石	石製	オクノマの沓脱石。長方形の切石。花崗岩製。
51	景石		赤石	流れの岸辺に据えた飾石。赤石。四国産。
52	鉢前		一文字手水鉢	オクノマから見て左手の付属屋への縁に設置された鉢前。一文字手水鉢は花崗岩製。海には那智石を敷く。
53	灯笼	石灯笼		「鉢明かり」として縁先手水鉢の左奥に置く。円形の生込み灯笼。風化による凹凸が古様。
54	灯笼			庭門に入って右手、伽藍石と庭門の間に設置。御影石製。笠から基礎まで円形の変り灯笼。笠の下面には放射状に垂木を表現する。火袋には菱形をデザイン化した彫刻が施される。
55	建造物	茶室	木造平屋建・和小屋・棧瓦葺	南妻部分に「清和軒」の額が掛かる。建物の南側と西側に短い庇を付け、南面に下地窓を設けて、数寄屋風なつくりをめぐる。新座敷に連なる貴賓のための接待空間で、浴室に付属する茶室となっている。茶室は一畳台目、平天井。茶室入口は西側で縁を有し、縁東は南側の塵穴の覗石にのる。
56	建造物 (構成要素は外観のみ)	離れ	木造平屋建・切妻造・棧瓦葺	昭和50年頃に敷地内で移築された建物。土壁仕上げとし、北側には伯耆国分寺出土の古瓦を用いた袖壁を建てる。東面に玄関を構え、茶室「清和軒」と路地でつなぐ。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧表 (環翠園)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
1	石畳	石畳		環翠園の外、東から北へ通る直線道路で、切石・自然石の寄石敷き。園路の縁石には多孔質の五郎太石を連ねる。庭門の手前と奥では石材や石敷きの仕方を異にする。
2	塀	塀	瓦葺塀	邸宅・工場側を画する近代的な塀。屋根は切妻造り棧瓦葺。
3	垣	垣	竹垣	環翠園側を画する石積上に建つ竹垣。屋根は切妻造り鉄板葺。東門の竹垣より軒を高く作る。竹穂を立子に用い、割竹を胴縁とする。
4	景物	煙突	煉瓦造	環翠園の入口に高く聳える明治26年築の元小川製糸場、小川酒造の煙突。20年前まで使用中には煙をあげた。危険防止のため20m以上切り縮められた。現在、高さ約12m、人工物の代表。以前は、煙突に巻きつく葛の紅葉が見事だったという。煙突から北側の庭の際に大きな楠木が立ち並ぶ。
5	門	庭門		石畳道路の丁度、中程に位置し、右寄りに入る門。屋根は切妻造りで鉄板葺。両開板扉で内側に開く。扉の一部に松材。端正・簡素な意匠であるが、東・出桁の部材の角を面取り風に装飾する。屋根板以外は檜材。30数年前に改修したが、元々の形を留めているという。門冠りは楠木。両側の竹垣は差石の上に作り、石畳道路沿いの竹垣より軒は低い。
6	景石			庭門前に翠色の珍石を左右に配置し、庭園名「環翠園」の伏線を敷いた上に、明るく広い空間を造る。
7	垣	垣跡	基礎石列のみ、形状不明	庭門の左脇から中門までの目隠し垣の基礎石列。奥の視界を遮断したもの。柱穴は六角形。
8	景石		伏石	垣の手前、左側の足元には、花崗岩の大きな伏石で迎える。
9	踏分石	踏分石	平石	庭門と中門の間、地元産の巨大な安山岩(へぎ石)を大胆に置いて踏分石とする。ここで、右から「待合までの登り道・起伏のある園路」・「洗心亭へ平坦に続く大道」・「中門から反橋を渡り茶亭へ」の三路に分岐する。
10	門	中門		屋根は切妻造りで鉄板葺。庭門と同様の技法・材で作るが、小型で扉を設けない。屋根板以外は檜材。30数年前に改修。門冠りは檜の木。中門を潜って右には構2本が植わり清浄の地を結界する。
11	灯笼	石灯笼	六角灯笼	中門を潜って右に立つ六角の変わり灯笼。御影石製。裾広がり半が特徴。笠部・中台・基礎に唐草様の円弧を印刻した美しいもの。灯上石は二段石。
12	石橋	反橋	組合せ式	元は意匠を凝らした来待石製の欄干の付いた、川に対して斜めに架かる広橋。幅0.9mの4枚の石を組み合わせる。本庭4橋の中で最も凝ったもの。欄干は破損した状態ではあるが、庭園内に残されている。橋の前方右の袂には珍石である白色の珪化木が据わる。橋袂石は、当地方の銘石である宇野石・佐治石である。反橋の左右で水の流れに違いがあり、反橋から見ると池の水面は波立たず、反対に下流は速い流れを作る。
13	池と護岸			池は東西約10.5m×南北約12.0mの規模で、中央に中島を造る。水源は鉢屋川。池の入り口では水の勢いを抑制するため、安山岩(へぎ石)一枚岩の石橋の下方、通常では見えない処に、流れを遮る水禦石を配置して水を受ける。同様の石材は中島の亀頭石にも使われ、流路の本流を茶亭南山荘の岸側に導く。池には錦鯉が飼われる。
14	中島	中島		池の中央部に中島を大きく造る。西に亀頭石、東に亀尾石を置く。両脚石・両手石などを備えた養亀を模した具象的な造形。背には三石を配す。石組の間に五葉松の根株が残っていたとのこと。
15	延段		互字状	徹石を組み込んだ2条の延段。花崗岩の円石を主とする短冊形。島根県松江市の有澤山荘向月亭の露地を志向する。
16	蹲踞		流れ蹲踞	川の中に設置。延段の先に石段を造り、流水の中に据えた自然石を穿った手水鉢へ降下させたもの。蹲踞周りの園路は多孔質の五郎太石を用いて変化をつけている。手水鉢の右手の川底には煉瓦が敷かれ、水の流れの中に赤色を添える。左の煙突の縦に対し、横の赤の広がりをもたせる。
17	灯笼	石灯笼	六角灯笼	流れ蹲踞の正面、向こう岸の左側に置かれた一丈物灯笼。御影石製。灯上石は二段石。宝珠は鋭く上方に伸び、火袋に牡丹と獅子、中台に十二支、基礎に兎と波と雲の彫りの深い彫刻を有した、装飾の華麗なもの。
18	沓脱石	沓脱石		南山荘の池に面した側に据える。向月亭に類する。御影石製の切石、上端の一角を故意に打ち欠く。この位置からは、池の向こう、築山に五重塔を眺望できる。
19	灯笼	石灯笼	六角灯笼	茶亭から左手に立つ灯笼。来待石製。火袋は火口を除く4面に持物を異にする4体の地藏像を彫る。反橋を渡り終えて見えるのは合掌像である。中台は上下面とも複弁連弁で飾られ、円柱の竿の上部と基礎には独特の懸魚風の装飾を施す。灯上石を有す。
20	建造物	茶亭	木造平屋建・和小屋・棧瓦葺	環翠園の景観の構成上、重要な建物で、鑑賞の中心点となっている。賓客の接待、茶事では、腰掛待合・茶室として利用された。池に面した四畳半台目の和室と水屋、隣接する茶室との関係は、有澤山荘向月亭と菅田庵との意匠に近似する。茶室は池に面した位置に作り、他は居住空間とした。妻部分に円額の掛けられていた痕が残る。外された円額には縦書で「南山荘」と墨書痕跡が残る。額裏には「南」の焼印。円額で縦書きとするのは菅田庵と同じ趣向である。池側前面の露地には、鞍馬石の粗目石(鞍馬の皮目石(微粒))が敷かれ、島根県荒島の粗目石を足している。四畳半間の着座位置からの庭園を意識した絵巻書がある。「観魚亭」の名は、南山荘のどの部分を指した名称か確証はないが、東側縁は川の流れにかかり、流れの中に「魚溜まり」が設けられている。大阪の丹青界に名をなした菅橋彦が、太平洋戦争中後(昭和20.4~昭和22.5)倉吉に疎開し、ここに住まった。昭和30年代の借主、神戸製鋼所所長、松岡徳太郎により、大規模な増改築がなされたという。南側の増築部分と推定される。
21	垣	垣跡	基礎石列のみ、形状不明	茶亭「南山荘」と茶室を画する石列。向月亭と菅田庵との間に垣があることから、垣の差石と推定される。「南山荘」から左手の茶室を遮るものとなる。
22	景物	欄干		「おがもかわはし」の欄干。反橋の脇に立つが、茶亭から鑑賞させる位置にある。小鴨橋は、近くを流れる小鴨川に架かる橋で、昭和5年工事、昭和7年3月に付け替えられた。もう片方の欄干、漢字で彫られた「小鴨川橋」は、倉吉博物館に現存する。
23	蹲踞		向鉢蹲踞	茶室入口部に設置。手水鉢は自然石。多孔質の五郎太石を縁石とし、海には水門石を組む。排水孔は手水鉢の右下、池へ流す。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧表 (環翠園)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
24	灯笼	石灯笼	寄せ灯笼	鉢明り。宝珠は禅宗様の高欄に似た逆蓮形、笠は宝篋印塔で、ともに転用したと思われる。火袋には日月を穿ち、中台は円盤、竿は相輪状に陰刻したものを組上げる。竿は生込んで茶室に調和させる。竿下部の蹲踞側には挟りが施される。灯上石は二段石。
25	建造物	茶室	木造平屋建・和小屋・棧瓦葺	妻部分に額を掛けていた金具が残るが、庵号不明。切妻屋根前面に金属板葺の庇を付け下ろす。茶室は一畳台目中板。開口の上に連子窓をあけ、軒内に二段石の刀掛石を設けた昔田庵写しの茶室である。床は洞床で、中柱を立てる。茶室の外南奥には、亭主の入口があり、水屋に入る。独自のものとして、茶室の外、開口東奥に、貴人座を別に設けている。貴人座の下には貴人石を置く。 傍らに丸形の塵穴を設け、赤～黄色のチャートを覗石とする。
26	石塔	五輪塔	五輪塔	茶室の左前に設置。空風輪は別物。火輪・水輪・地輪は一石彫。火輪上面の風化が著しい。
27	延段		寄石敷	茶室前面の池側に設置した延段。池の外側に細長い御影石の切石を、内側に青石(三朝町竹田川上流の石:竹田の石)の玉石を段差をつけて低く敷き詰めたもの。庭園内で段差を造る延段はこれのみ。
28	灯笼	石灯笼	生込み灯笼	中島へ渡る位置に設置。御影石製。四角形の火袋に円形と方形の窓が開く。中台に流水様の装飾をもつ。
29	沢飛び石			中島への飛び石を流れの中に設けたもの。中島への唯一の道。降立つ手前の石は緑色の結晶片岩、四国産の青石。
30	石橋		平橋	安山岩(ヘギ石)一枚の自然石の広い橋。橋梁は無い。真下に水流を抑制する石を据える。橋の左先に佐治石を据える。
31	踏分石	踏分石	平石	大きめの安山岩(ヘギ石)の橋挟石を斜めに据え、左の登道と右の平坦な道とに分岐させる。
32	園路	飛石		平橋から腰掛までの緩い登道に打たれた飛石。昭和17年12月の写真では腰掛までに木戸が開く。
33	建造物	腰掛待合	木造平屋建・和小屋・切妻造・金属板葺	南の腰掛待合。中門の正面方向の築山上に立地。屋根と壁の手前1間分を欠失し、腰掛待合も撤去されているが復元可能。前面吹き放ち構造。軒内のたたき土間に、大石の平板自然石を据える。壁左側に窓が開き、滝口を見せる。 左裏側に実用の下腹雪隠が付き、腰掛の手前横から裏に回る。雪隠の目隠しの袖垣がある。腰掛待合の背後は土留めのための石積みめぐる。
34	灯笼	石灯笼	寄せ灯笼	南の腰掛待合の前に設置。五輪塔の空風輪、宝篋印塔の笠、に来待石製の火袋から竿までを組合せる。灯上石は二段石。
35	灯笼	石灯笼	置灯笼	南の腰掛待合の裏に回る位置に設置。五輪塔の空風輪を載せた創作灯笼。笠はランプシェード様で、火袋には方形窓が六方に開く。脚は短く、自然石の台石に乗る。
36	蹲踞		向鉢蹲踞	南の腰掛待合の裏、雪隠のそばに設置。手水鉢は自然石。海の中央に排水孔があり、全体に玉石を敷く。
37	灯笼	石灯笼	生込み灯笼	鉢明り。手水鉢の右側に設置して雪隠の明かりも兼ねる。御影石製。中台以上四角形、竿円柱。
38	灯笼	石灯笼		南の腰掛待合と滝川の間に設置。来待石製。大きめの笠に長い2本の脚が特徴的。中台以上は六角形。
39	沢飛び石			滝川を渡る飛石。石質を異にする個性あるものを配置する。飛び石の近くの水の流れる部分には水流を見立てた橋模様の石が2石置かれる。
40	滝組・滝川			庭園南部、最高所から滝を落とす。落差1.5m。滝の上部に水量を溜めて布落ちとする。流れ出た水は石と石の間を複雑に流れる渓流となり、その渓流を渡る飛び石辺りで一機に扇形に広がって、水量豊かに曲水に流れ落ちる。現在は水の供給が断たれ涸滝となっている。滝川底は青石(三朝町竹田川上流の石:竹田の石)が貼付けられる。 滝口の崖の岩には、常緑シダ、ヒトツバが密生する。
41	橋	木橋		栗材の丸太を2~3本合わせた丸木橋の痕跡を残す。滝川を渡る沢飛び石から後戻りをしないで、山中の谷川を渡る風情を作ったもの。この橋によって、鉢屋川からの取水口を隠す。
42	灯笼	石灯笼	生込み灯笼	取水口と茶亭の間に設置。来待石製。細長い方形の火袋をもつ袖形灯笼の創作もの。環翠園に同形の灯笼が2基あるうちの大きい方である。下部腐食。
43	灯笼	石灯笼	六角灯笼	水を引き入れた川沿いの園路の茶室近くに設置。御影石製。火袋の左右に日月を彫りぬき、火口は隅切窓形。灯上石は二段石。 周囲にはモミが4本植わる。
44	蹲踞		向鉢蹲踞	南の腰掛待合の脇に設置。手水鉢は絶妙の自然石の奇岩を用い、湯桶石には緑色(結晶片岩、四国産の青石)を据える。海中央には排水孔が開き、全体に3cm大の那智石を敷く。
45	灯笼	石灯笼		「鉢明かり」として手水鉢の左奥に置く。御影石製。笠に菊文のある灯笼で、基礎は花卉状を呈す。太陽形灯笼。
46	景物	道標		庭門から最も遠いところに、江戸時代後期、嘉永五年(1852)銘のある大坂の道標を立てる。本庭の名品の一つ。花崗岩製。 南山荘側:「すぐ ござば 道頓堀 天王寺/両御堂 御城 八けんや」 洗心亭側:「右 京 なら 伊勢 道/すぐ 堂嶋 天満天神」 南腰掛側:「右 十三 中山 能勢 道/左 尼崎 西宮 兵庫」 橋込み側:「すぐ 安治川 天保山 嘉永五壬子年二月建立/世話人 □屋大蔵/□屋善七」
47	灯笼	石灯笼		庭門から中島を挟んで最も奥に設置。一寸物の灯笼。来待石製。灯上石は二段石。小川氏庭園内に同形3基あるうちの最大のもの。笠の軒先端が外上方に反り、蓮台様中台の連弁が火袋までせり上がる華美なもの。火口に風を防ぐためのガラス障子を設ける。 竿下部に「出雲松江藤井善太郎作」と銘を刻む。
48	石塔	五輪塔	五輪塔	道標の園路を挟んで池側に立つ。当地の鎌倉時代後期の五輪塔。空風輪は別物で、多宝塔等の諸花部分の破片を逆位で組み合わせる。
49	井戸	井戸・枯流れ		南の滝口と西の泉川との丁度、中程に位置する。井戸の写し。井戸枠は組合せ式で花崗岩製。井戸の手前に池に注ぐ遺水風の枯流れを石組し、那智石を敷いて水の流れを表現する。井戸枠の中には拳大の黒石を底に詰める。 井戸の白色に対して、右手に緑色(結晶片岩、四国産の青石)の景石を据え、前石には橙色を使い、周囲を四国の赤石で固め、色彩豊かである。
50	灯笼	石灯笼	縁部灯笼	井戸の奥、平橋と道標の間の園路沿いに設置。御影石製。
51	蹲踞		中鉢蹲踞	茶室「洗心亭」の前面に位置する。水門内に段差を作り上段に手水鉢を据え、周囲を役石や古代瓦などで囲う。瓦は古代の伯耆国分寺の軒瓦を用いる。排水孔は池側。海には雑多な小石を敷く。 蹲踞の近く、左には珍石である珪化木が据わる。
52	灯笼	石灯笼	雪見灯笼	手水鉢の右奥に置く。猫脚の雪見灯笼。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧表 (環翠園)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
53	建造物	茶室跡		茶室「洗心亭」。庭園の西側、庭門の正面の位置にある。建物は解体され、建物基礎のみ。絵葉書に残る建物は、入母屋造り茅葺の草庵風茶室。出入口は貴人口のほか北に開口を設ける。軒内の左手に角形の塵穴を設け、翠色の観石を据える。茶室の背後は土留めの石積が巡る。 この石積の西には柿の木、北には楓・孟宗竹が植わる。 中島を望み、仲秋の名月を鑑賞するのはこの茶室であり、格の高い代表的茶室と推定される。
54	沓脱石	沓脱石		貴人口の沓脱石。自然川原石。建物前面のたたきには伯耆国分寺古瓦を敷き並べ、まさしく古雅なたたずまいをつくる。
55	踏石			茶亭「洗心亭」の開口に連なる踏石・落石は、青黒石を寄せて積み上げた近代的な二段の階段とする独特の意匠。
56	蹲踞			茶亭「洗心亭」の茶道口に設置。小振りの手水鉢を台石の上に置く。海には雑多な小石を敷く。
57	灯笼	石灯笼		茶亭「洗心亭」の開口前に設置。来待石製。六角の創作灯笼。宝珠と基礎部分が三段の環状を呈す。火袋は方形と火打窓形が交互。灯上石は二段石。 灯笼の右には梅の老木がある。
58	蹲踞		流れ蹲踞	溪流下の流れ蹲踞。水を溜めた中には小川家の家紋「釘抜き紋」をあしらった手水鉢を置く。手水鉢は灯笼中台の転用で、下面に連弁を有す。環翠園の中で、水穴が方形の手水鉢はこのみ。花崗岩製。
59	流れ		溪流	西側築山から茶亭「洗心亭」方へ流れる溪流を作る。水は蹲踞の海に溜め、そこから溢れる水を敷石の間の広い範囲に見せる。水は延段の池寄り端の溝を流れる。溝内は赤い色合いの石を敷き、園路と色別する。豪快な石敷きの中に繊細な水の流れを融合させた趣向。
60	層塔	層塔	五重塔	庭園の西側築山の最高所に立地。池と泉川の間に立つ。来待石製。大型ながら垂木・階段・高欄(格狭間)など細部を丹念に掘り出した精巧優美なもの。 周辺は檜林となっている。
61	園路			茶室「洗心亭」から五重塔までの園路。
62	池		小池	五重塔と藤棚の間に位置する。築山の高所に、大型の智頭石を組んで小池を作り、池中央に石を置いて沢飛び石とする。池の水は暗渠とした導水管で溪流の方へ流れる。
63	園路			五重塔から庭園北側入口までの園路。
64	園路			庭園の北側の出入口。もともとは、中庭から最短の入口。長さ約4.5mの曲線のスロープで、多孔質の五部太石の縁石の内側を、カラフルな小砂利の洗出し。上段には、円柱状に加工した乱杭石を連ねて石段とする斬新な階段。出口部に門の円柱痕跡2本が残る。
65	棚	藤棚		築山高台の藤棚。園内外の眺望の良いところ。南山荘の全景、水道山の中腹に建つ十三重塔を望み見せる。藤の花は白色。藤棚の平面形は不整形で、遠近法の効果を狙い、北側から実際よりも長く見せる。
66	石敷		氷紋敷	藤棚の内に長方形の氷紋敷の延段を作る。へぎ石を組み合わせたもので、色・形に変化をもたせた精巧なもの。
67	物見石			藤棚の南に位置する。築山の端に据えた平石で、庭園外の水道山に建てられた十三重塔を眺望する。
68	園路		石段	踏分石から藤棚へつづく石段。北の腰掛待合へ至る。
69	灯笼		置灯笼	中島の北側、池の縁に設置。御影石製。小さな取手が付く笠に、大きめの火袋と猫脚が組まれる。灯笼下の園路の際に水が流れる。
70	池汀			池汀に降り立つ部分を作る。池に向って右側を泉川からの流水が池に注ぐ。 池汀の東側に大振りの白い石が生まれ、鶴石とする見方がある。
71	延段			庭門と茶室「洗心亭」との間の中程に、本庭園最長の3.47mの竿石を用いた延段を敷く。竿石はよく磨かれている。
72	景石			延段の両側に位置する。池側に産んだ磯石が据わる。延段を扶んで大石が組み合う。陰陽石の可能性がある。 大石の築山側には馬酔木が植わる。
73	園路			庭門前の踏分石から延段までの飛石は、大振りの自然石を密に使用した豪快なデザイン。
74	灯笼		蓮華寺式灯笼	庭門の西側に設置。御影石製。一丈物灯笼。中門から見て、2基の一丈物灯笼は等距離にある。笠は急勾配の屋根をもち、中台に七宝、中台下面と基礎に単弁蓮弁を装飾。灯上石は二段石。
75	園路		石段	五重塔前から茶室「洗心亭」に向かう石段。
76	建造物	腰掛待合		庭園北の腰掛待合。前面吹き放ち構造、腰掛をしつらえる。屋根及び壁を損壊。前面の壁に窓を有す。伴う蹲踞は1基。腰掛の向かって左側に実用の下腹雪隠がある。腰掛の東側から庭門まで楠木の太木が並べて植わる。 元は、腰掛待合から見て右側に黒松の切株が残る。
77	蹲踞			雪隠に伴う蹲踞の園路は短冊石2本、手水鉢は環翠園唯一の加工石で六角柱状。側面6面には松・梅などの花木が彫刻される。花崗岩製。
78	灯笼			蹲踞の奥に設置。来待石製。細長い方形の火袋をもつ創作灯笼。 環翠園に同形の灯笼が2基あるうちの小さい方である。
79	敷石		円形	庭門に入って踏分石から右の石段を登った、煙突の足元に位置する直径約1.7mの大円形の敷石。青黒石を敷き詰め、周囲を方形に区画し、北側は石積を伴う。半球状に荒削りした花崗岩の底面に那智石を敷き詰めた椅子様の人工的な小型石造物が近くに有る。同様の意匠で作られていることから、ここで使用された可能性がある。
80	建造物	東門		茶亭の玄関に取り付く門。茶亭の材に揃えた数寄屋造り。両開板扉で内側に開く。東門の両側は差石の上に竹垣を作り、鉢屋川沿いの板塀より軒を高くする。
81	棚	藤棚		東門近くに設けた藤棚。花は藤色。長さ約4mで平面長方形。 茶亭への長い延段の上に架かり、鉢屋川沿いの外板塀に映える。
82	延段			東門から茶亭の玄関までの園路。短冊石と青黒石を混用した長い延段を左に左に連ねていく。
83	灯笼		変形灯笼	藤棚の右脇に設置。藤蔓をあしらったモダンな変形灯笼。竿には蔓が巻き、笠には幹の切り口を表現する。花崗岩製。灯上石は二段石。
84	灯笼			東門から茶亭の玄関の間に設置。火袋に日月を穿つ。灯上石は二段石。
85	灯笼			茶亭の玄関手前右に設置。来待石製。同形の灯笼が小川氏庭園に3基あり、その中の小型品。灯上石は二段石。
86	鉢前			茶亭「南山荘」の簀子縁に接して据える。縁先手水鉢は自然石ながら橋杭形に見立てた窪みを有する。海には那智石を敷く。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧表 (環翠園)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
87	沓脱石	沓脱石		鉢前の隣に位置する。花崗岩製、自然石。
88	垣	袖垣		鉢前に設置された袖垣。
89	灯笼		雪見灯笼	茶亭の縁先水鉢の近くに設置。川にせり出す大型の平石の上に据える。火袋と中台は来待石製。脚は四脚でコンクリート製。
90	橋		石橋	東門の西に設置。地元の向山石の切石。半石2本をコンクリートで接合した細橋。橋梁はない。
91	園路			細橋から中門への園路。多孔質の五郎太石の石敷き。曲がりくねった園路を作る。小鴨橋の欄干の付近に柱痕跡が1本あり、簡単な開き戸のあった可能性がある。
92	層塔	層塔	三重塔	細橋から中門への園路沿いの魚溜まり付近に設置。コンクリート製、小振り。黒っぽい砂利を混ぜて造る。相輪部を破損。南山荘の縁側からも鑑賞させる。
93	建造物	板塀		鉢屋川沿いの板塀。鉄板葺、柱・屋根・横板壁材は檜か杉材。
94	建造物	石垣と板塀		環翠園を囲する南から西の道路沿いに設置。石垣の上に鉄板葺の縦板塀。

名勝 小川氏庭園 構成要素一覧表 (水道山)

番号	構成要素の名称	構成要素の細目	形状・形式等	備考
1	層塔	層塔	十三重の塔	基壇部一辺約2.3m、基壇部高約0.7m、基壇から相輪基部（基部から先端までは欠損）までの高さ約5.2m。表面モルタル塗り。相輪部欠損。

